

# 蘇芳集

初景色

青山

丈

いつも来て帰る辺りの返り花  
綿虫の先に知らない人が居る  
何もない日と思つたら一の酉  
柗の花わすれたら忘れたで  
暮れ泥むまで探梅の道にゐる  
この家の者だけのこゑ鏡餅  
千住から次の草加の初景色

遠き記憶

宮尾直美

帰り来て家の温みや室の花  
花買うて団子を買うて暮早し  
天気図の北より動く冬椿  
母の忌の炭つぐ遠き記憶かな  
煤逃げの漢来てゐる始発駅  
あをあをとしんしんと暮れ冬菜畑  
クリスマス深紅の花を選りにけり

年の暮

八木下末黒

枯木宿テーブルクロス格子縞  
日短し雨戸を立てて聴くラジオ  
裏に置くプロパンボンベ避寒宿  
うすうすと煙の終はる浜焚火  
大風が雨戸を叩く年の暮  
ボサノバに忘我の茶房年詰まる  
数へ日の鴉二こゑ三こゑ哉

葉 紐

吉田幸敏

この空の先に戦争去年今年  
喰積や艶いや増せる輪島椀  
鶏日の大地の揺らぐ甲辰  
地震のこと 馱伝のこと 初日記  
蜜柑に種常陸の国に要石  
読初の 天金を割る 葉紐  
厨守る 珠洲の水甕 春よ来い

雪 蛭

小川美知子

動かない 青鷺のゐる 冬景色  
海へひらく 電車の扉 十二月  
綿虫を 目で追ふ 海の青さかな  
いつか 来た 気のする 駅の雪蛭  
入口に 段差の ありて 帰り花  
人の句を 愛しむ ことも 年の暮  
恍惚として 蓮の葉の 枯れてをり

愛 日 の

木内憲子

ていねいに 読む 愛日の 一字一字  
冬の 水おのれ 映さむには しづか  
水の きは なり 雪吊の 一本目  
冬滝の たぎれる ものを 聴きとむる  
割り箸の 手応へ 冬も たけなはに  
息吐いて 終る 寒夜の ひと仕事  
数へ日といへば そろそろ それらしく

雪 解 水

清水裕子

一山の 枯木 明りに 神の 鈴  
雪解の 水きららかに 川を 満たし  
冬つばき 盛りの ころよ 夕霧忌  
園丁に 軍手 大切ばらば 芽に  
背伸びして 春青空の 真下かな  
身を 振り笑ふ 兎と みる 暖かし  
堰を 越す 水の 饒舌 春隣

一輪の花

下平直子

春なれば

野路斉子

呼鈴がまた鳴り師走始まれり  
極月の移動スーパ―小賑はひ  
無傷なる空を鳥ゆく開戦日  
掃き寄せて日暮の匂ふ落葉かな  
餅搗きの始まつてゐる囃し声  
古曆夫癒えし日の星印  
空席に一輪の花年忘れ

綿虫

富田正吉

きのふの服

別府

優

小六月遊ぶと決めて遊ぶかな  
綿虫と仲良くなつて帰りけり  
仲見世の十一月の匂ひかな  
佗助や呼ばれるまではここに居る  
空つぽの頭が歩く枯るる中  
綿虫追ふ眉に力を集めつつ  
ポケットの蜜柑投げ上げ人憶ふ(樟小山陽子さん)

未だ吾がでで虫部屋に冬眠中  
今日からはよく見る夢も春の夢  
歩かない足を歩かす春寒く  
この庭の歴史さだかに葦濃く  
諸草を踏んでしまひぬ春なれば  
三つ目のお握りおかか春遅々と  
行き先は告げず歩かむうらうらと  
散る銀杏何があつても無くつても  
何時よりか卓に日のある室の花  
一葉忌きのふの服に腕通し  
裏の路地表の路地のクリスマス  
ポップコーン弾けて十二月八日  
何もかも齢にかこつ年の暮  
いくたびも敷居を跨ぎ年暮るる

かがやかす

前田 陶代子

数へ日

峰岸 よし子

皆で見て梅檀の実をかがやかす  
草引いて十一月の露こぼす  
初鴨の水尾重なつて重なつて  
鶏頭の赫きしづもり触れてなほ  
一木に鴉の呼応うそ寒し  
かつ散れる街路の樗紅葉かな  
鉛筆の芯のまつ黒火恋し

冬

松原 ふみ子

倒木は倒木のまま冬はじめ  
冬に入る村社は千木に日を集め  
木道に続く木の橋霜の声  
よき森を得て凧の吹き募る  
冬深む干されて魚の透き通り  
この道も辿れば越後雪起し  
冬ざれや落日は朱を尽しつつ

凧のはためきやみし星の数  
しあはせの顔は相似ておでん鍋  
口中の乾きに醒むる霜夜かな  
木菟鳴くや利鎌のやうな二日月  
夜の卓のメモへみかんの灯りたる  
青木の実些事もまた身のときめきに  
数へ日のそのいち日の暮れにけり

